観察のまど
子どものにわ（3）

砂上史子

三歳児の「集まり」

子ども集団に参加する時期の三歳から四歳

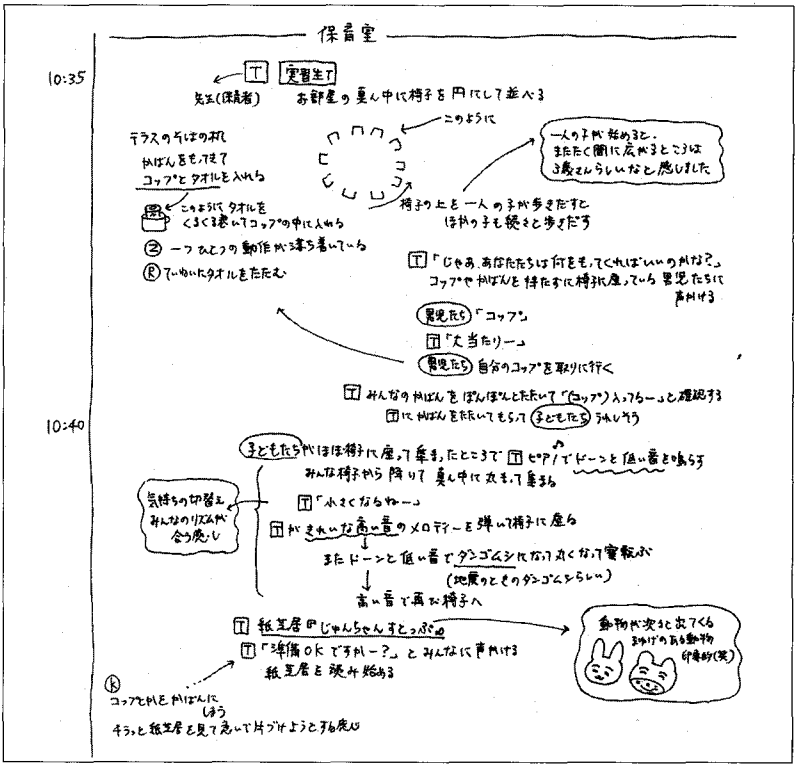
幼稚園や保育所での生活が家庭と大きく異なるのは、保護者がいないということに加えて、同年齢の子どもたちと「集団」で生活するという点にあります。〇～二歳児が家庭から離れて生活する保育所でも、二歳児は子ども六人に付きおおむね一人以上の保育士の配置ですが、三歳児になると、子ども二十人に付きおおむね一人以上の保育士の配置となります。発達的にも、三～四歳ごろにかけて、子ども同士のかかわりが活発になり、ほかの子どもとのかかわりを求めるようにもなります。従って三～四歳は、子どもが本格的に集団生活に参加する節目の時期であるともいえます。

園生活は、クラスが子どもの所属する集団となります。しかし、子どもは最初から、自分が「〇〇組」と、クラスの一員であることを強く意識しているわけではありません。「〇〇組のみんな」の中に自分が属しているという意識をもち、「みんな」で一緒に何かすることを楽しむことは、日々の積み重ねの中で少しずつ醸成されて

いくものだといえます。今回は幼稚園の三歳児の帰りの「集まり」の場面の観察記録から、三歳児の「みんな」で集まる意味と、そこでの保育者のかかわりについて考えてみたいと思います。

三歳児の六月の集まり
みんなでダンゴムシになる

図1は、三歳児クラス六月の帰りの前の「集まり」の場面です。この園では、朝は登園してきた子どもから順にかばんなどの所持品を所定の場所に置き、遊び始めることから、クラスのみんなが集まるのはこの帰りの前の「集まり」になります。



▲図1：6月中旬の「集まり」

図1にあるように、この幼稚園では、椅子でぐるっと円（クラスによっては四角）を描くように並べて集まります。六月の時点では先生が椅子を並べていましたが、次第に子どもたち自身が自分で椅子を並べるようになります。

図1の中で、先生が並べた椅子の上を一人の子が歩き出すと、ほかの子も続々と椅子の上を歩き出す姿について「三歳さんらしい」と、観察者である筆者はコメントしています。誰かが始めたことが「伝染するように」子どもたちの間に広がっていくことは、幼児ではよく見られることです。このように「なんかおもしろそうだな」と感じて（あるいは感じる間もなく）、同じ動きをすることによって子ども同士は互いに親しみを感じるようになり、そのことが仲間意識、クラス意識といったものにつながっていきます。椅子の上を歩くことは行儀の面では、あまりよくないことですし、「集まり」の場面で、子どもたちがふざけてじゃれ合いだすと、先生の話が耳に入らなくなり、先生としては少し困ってしまう面もあるかもしれません。しかし、互いが影響し合って動くということは、みんなで集まるからこその経験なのではないでしょうか。

また、帰りの前の「集まり」では、コップとタオルをかばんにしまうなど、生活習慣にかかわるやるべきことがあります。入園からしばらくの間は、それができたりできなかったり（やろうとしたりしなかったり）するものです。そのような中で、図1で先生がコップやかばんを持たずに椅子に座っている男の子たちに「じゃあね、あなたたちは何を持ってくればいいのかな?」「大当たりー」と気づかせたり、コップの入ったかばんをポンポンとたたいて「（コップ）入ってるー」と確認したりするなど、できていないことを指摘するのではなく、気づけたことできたことを認める言葉かけが子ど

もの意欲を引き出すといえます。

「何かをしているうちに集まる」流れを大切に

図1では、子どもたちがほぼ椅子に座ったところで、先生はピアノのドーンと低い音を鳴らし、子どもたちはダンゴムシのふりをして真ん中に集まります。次に先生が高い音を鳴らすと子どもたちは椅子に座ります。この音とリズムの繰り返しの中で、ダンゴムシのふりを楽しむうちに、子どもたちの気持ちと動きが一体となっていきます。「みんなで集まる」ということを強く意識しすぎると、みんなで集まること自体が目的になってしまったり、活動に参加していない子がとても気になってしまったりして「集まり」が先生にとっても子どもにとっても、プレッシャーを感じる場面になりがちです。しかしダンゴムシのふりを楽しむことのように、動きの中で自然と子どもたちの間に一体感が生まれるような活動を工夫することが、重要なのではないでしょうか。「集まり」の場面では、いかに子どもの注意を引くかということが語られがちですが、それ以上に、活動の中に埋め込むようにして、子どもの注意や一体感を引き出すことが重要であり、そこに保育者の専門性があるといえます。

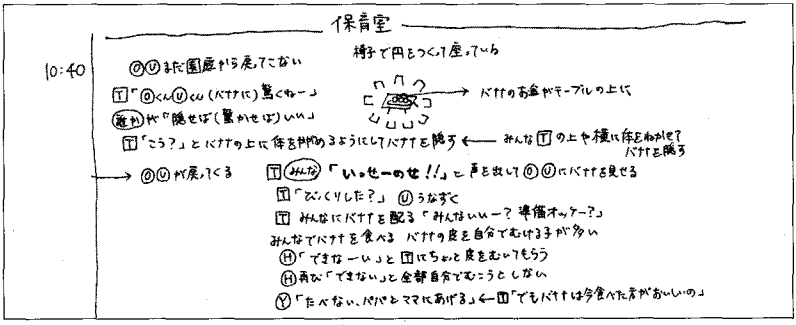
その意味で、特に入園間もない時期の「集まり」の場面では「みんなで集まって何をするか」という流れよりも「何かをしているうちに集まりになる」という流れのほうが、子どもの気持ちに沿った無理のないものであるように思います。それは、図1の中で、先生が紙芝居を読み始めるのを見て、Kちゃんがコップを急いで片づけようとしている姿に見られるように「自分が片づけないと、紙芝居が始まらない」というのではなく「紙芝居が始まっちゃうから急ごう」という気持ちの流れとも対応するものだといえます。そうした流れの中で、子どもの中に「みん

なで集まることが楽しい」という気持ちや「みんなで」という意識が育ち「集まり」で「みんなで」一緒に何かをしたり、注意して話を聞いたりということが身に付いていくのではないかと思います。

またKちゃんのように、全体の流れよりもゆっくり動いている子どもは、その子自身がクラス全体の活動の流れを感じとり、自分で気づいて動き出す経験があることで主体的に活動に参加することにつながっていくのだと思います。

三歳児の十月の集まり「みんなで」バナナを食べる

図2は、図1と同じクラスの十月下旬の帰りの前の「集まり」の場面です。この日は、バナナを食べることになっていました。みんなで椅子を並べ、手を洗って椅子に座って集まると、O君とU君がまだ園庭から戻ってきていませんでした。先生は二人が戻ってきていないことについて、「O君とU君（バナナに）驚くねー」と子どもたちに話します。誰かが「隠せば（驚かせば）いい」と言って、先生が「こう?」とバナナの上に体をかがめてバナナを隠すと、子どもたちは一斉に、先生の上や横に体を寝かせて、バナナを隠します。その後、保育室に戻ってきたO君とU君にみんなで「いっせー



▲図2：10月下旬の「集まり」

のせ」と声を合わせて、バナナを見せました。

何気ないやりとりのようでありますが、このようなやりとりを生み出す先生の言葉かけの中にも、上述した保育者の専門性を感じることができます。まだ戻ってきていないO君とU君について、「遅いね」「早くくればいいのにね」などと言うのではなく、「（バナナに）驚くねー」と話すことで、子どもたちにとって、O君とU君が戻ってくるまでの時間が「待っている」時間ではなく「驚かそうと準備する」時間に変わり、自然とみんなで一つのことを楽しむ時間になっています。また、同時に戻ってきていないO君U君も含めて、「みんなで」という意識が強められています。

また、誰かが発した「隠せば（驚かせば）いい」という言葉に、先生がすぐに「こう？」とバナナを体で隠すふりをしているように、先生がていねいに子どもの言葉に応えることで、子どもたちの関心が、自然な形でまとまっていきます。さらに「みんな」の活動につながっていることは、個々の子どもの興味や関心が、うまく活かされることが集団での活動に意味をもたせることを示しています。

みんなで集まって同じことをする場面では、入園当初は活動の流れに気持ちが乗らなかったり、遅れたりする子どももいます（むしろ、それが自然でもあります）。そうした子どもの姿を、どのようにとらえ、ほかの子どもにどのように伝えるか（伝えないことも含めて）という点に、その先生の保育観も含めた専門性が現れているといえます。

そして、そのような専門性に根差した日々の何気ないやりとりを通して、子どもたちは「みんな」で共に生活し、共に活動することを楽しむようになっていくのだと思います。

（千葉大学　教育学部　保育学保育内容と発達との連関を研究）